

利用者意識と座席選択からみた居場所としての 大学図書館に関する研究

A Study on the Planning of Academic Libraries as a Place to Stay according to
the Users' Awareness and Seat Selection

蒋 逸凡[†], 中井 孝幸^{††}
Yifan JIANG, Takayuki NAKAI

Abstract : Academic library including a new feature called "Active Learning" is increasing at the present time. However, the requirement of "Active Learning" for each university presents large difference of educational philosophy and regional location. The purpose of this research is to clarify the positioning of each academic library which possesses different educational philosophy, and how do the users make their seat choice to work and study. The main results are summarized as follows: the academic library is not only a place for reading books, but also for holding a variety of learning activities and communications between students and teachers. The majority of visitors are likely to select seats where they can work easily by themselves. For this reason, it is important to do planning well for dividing the place of library into quiet part and bustling part. And the library is supposed to be able to expose its charm to keep users to stay in the library for a long time.

1. 研究の目的と方法

1.1 研究の目的と方法

1) 研究の背景

大学図書館は、本来の目的である高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤であり、大学にとっては必要不可欠な機能を持つ中核を成す施設である。

近年、大学を取り巻く環境は大きく変化している。少子化に伴う大学間競争が激化し、図書館内の環境においては、情報化社会における学習形態の変化、電子ジャーナルの普及など、大学図書館に求められる機能は多様化してきているといえる。さらに、現代の大学図書館は、学生のキャンパスライフの中で、従来の静かな場所での図書館サービスを受けるだけでなく、バード、ソフト両面の魅力により学生が集える可能性を持っている施設ともいえる。

一方で、最近の大学図書館では、ラーニングコモンズと呼ばれる学生が共に学ぶ共有のスペース、つまり学生同士が活発にディスカッションしながら知識を深め、共に考える場(アクティブ・ラーニング)が計画され始めている。このように、

様々な学生の学習スタイルに対応ながら、各大学の特色を生かした大学図書館が計画されている。

2) 研究の目的

現在、アクティブ・ラーニングを取り入れる大学図書館が増えつつあるが、求められる各大学の教育理念や地域性は異なる。今回は様々な教育理念や取り組みを行っている大学図書館を対象として、研究を進めることにした。利用者は図書の貸出サービスだけを求めているのではなく、図書館で提供されている様々なサービスを利用している。図書館利用をみつめなおし、館内で滞在することを目的に来館した利用者は、図書館をどのように位置づけて利用しているか、またどのような「居場所」として認識しているのかを整理し、今後の図書館計画への示唆を得ることを研究の目的としている。

1.2 研究の方法

1) 研究対象

地域の教育力を支える大学から、ノーベル賞を輩出するような大学まで、図書館に求められているサービス、あるいは学生が求めているサービスは、各大学で異なるはずである。そこで、文系、理系などの教育内容や特徴的な図書館サー

[†] 愛知工業大学大学院 建設システム工学専攻

^{††} 愛知工業大学 工学部 建築学科 (豊田市)

ビスの提供、蔵書冊数などの規模を総合的に判断して以下の 4 大学を選定し、学生の図書館に対する利用意識と利用状況を把握した。

愛知工業大学附属図書館(理系)、大手前大学さくら夙川キャンパスメディアセンターCELL(文系)、神田外語大学附属図書館(外大系)、国際基督教大学図書館(文理系)の 4 つの教育理念や特色が異なる図書館を今回は調査対象として選定した。

2) 研究の進め方

まず来館者のアンケート調査を基に、各図書館の施設像と利用者が気に入っている座席とその選択理由から、どのような居場所として利用しているかについて考察を行う。また各館で行った巡回調査を基に、館内における様々な座席選択の利用実態と館内利用者を「個人」と「グループ」に分けて、各自が選択した座席でどのように過ごしているかについて考察を行う。結論では図書館で様々な利用者によって認識される居場所と図書館計画の関係について考察を行う。

1.3 調査対象館

調査対象館と調査の概要を表 1 に示す。

1) 愛知工業大学附属図書館 (以下 AIT)

愛知工業大学附属図書館の特徴としては、開架書架が 4 階、積層書庫が 6 層から成り、各フロアで雑誌や図書が分類され配置されている。

2) 大手前大学メディアライブラリ—CELL (以下 CELL)

図書館の特徴としては、大学の教育理念から少人数で学習することを目的とした学習室(cell)が、図書館1階の一般開架室の周囲に配されている。時間外は、外部からも利用

可能となっている。また地階は、デスクトップパソコンが窓側や壁側にレイアウトされている。

3) 神田外語大学図書館 (以下神田)

新築の 7 館は、1 階にカラフルでさまざまな椅子を配置している図書館、2 階に教室や MULC という多言語コミュニケーションセンター、3 階にカフェを含む複合施設である。MULC は、学んでいる各専攻言語の現地の街並みや建物が再現され、ネイティブの教員や留学生との会話を促し、そして様々な語学学習ツールが設けられている^{注1)}。

4) 国際基督教大学図書館 (以下 ICU)

大学は英語能力の教育を重視しており、図書館の特徴としては洋書と和書を一緒に配架している。2000 年のオスマー図書館増築時に、日本で初めて自動出納書庫を導入し、書架の無い閲覧席(スタディエリア)を計画している。また、リザーブブック制度(教員が指定する必読書を図書館内で管理)を運用するなど、本を活用した授業を行っている。

1.4 調査概要

1) 来館者アンケート調査

調査日において開館から閉館まで、各図書館で全来館者を対象とした来館者アンケート調査を行った。アンケート票は入館時に配布し、退館時に回収した(表1)。

2) 巡回調査

15 分おきに行い、事前に決めたルートを歩きながら調査員の目視によって姿勢、行為、属性を平面図に記入していた^{注2)}。

2. 図書館における利用行動

利用者の座席選択行動を解き明かすために、まずアンケート調査結果から利用者は図書館に対してどのような意識を持って利用しているのか、また各館で利用者が求めているサービス、あるいは図書館に何を期待しているのかについて分析を行う。

2.1 館内で利用行動

1) 利用頻度

図書館の利用頻度についてみると、AIT と CELL、神田の 3 館では、利用者は「1 週間に 2, 3 度」の割合が一番多い。ICU 館では、利用者は「毎日」の割合が 46%と一番多く、4 館で最も利用頻度が高くなっていった。4 館とも 1 週間に 1 度以上利用する割合が 80%~90%となり、非常にリピーターが多い(図 1)。

表 1 調査対象の概要

図書館名	愛知工業大学 (AIT)	大手前大学 (CELL)	神田外語大学 (KUIS)	国際基督教大学 (ICU)
竣工年月*2)	1974/7/1	2007/6/1	2008/9/1	1960/6.2000/1
学生人数(人)*1)	6,229	3,217	3,737	2,970
図書館面積(m ²)*2)	3,813m ² *2)	2480m ²	3,821m ²	8307m ²
施設全体面積(m ²)	4259m ²	4478.60m ²	7156.07m ²	
開館時間*3)	9:00-21:10	9:00-18:30	9:00-19:00	8:30-22:30
蔵書冊数(千冊)*1)	299	227	187	711
雑誌種数*1)	2,316	2,626	1,918	5,746
調査日	2011.10.04.	2011.10.13.	2012.10.17	2012.10.18
天候	晴れ	曇り	曇り	雨
来館者数	743	874	599	734
配布数	389	466	573	710
回収数	299	391	342	562
回収率	77%	84%	60%	79%
調査日貸出者数	115	55		199
巡回プロット調査				
座席数	534	507	348	694
調査時間	9:00-21:10	9:00-18:30	9:00-19:00	8:30-21:45
巡回回数	48	38	40	53
プロット総人数(人)	1,510	2,667	1,214	5,345
備考	耐震工事中			

*1)日本の図書館統計と名簿 2010.2011 *2)図書館年鑑2012 *3)各大学ホームページ参照

2) 利用目的

図2に示すように、AITで最も多い利用目的は「本を探す」31%であった。館内の蔵書冊数が30万冊であり、利用者は本を探したり、拾い読みをしたりするなど、本に関する利用目的が多い。

CELLでは館内でパソコンの設置やノートパソコンの貸出を行っているため、「パソコンを使う」が最も多く、「本を読む」「本を借りる」など本に対する利用割合がやや低い。また、小教室(CELL)での「ゼミ・サークル・授業」など、人との交流を目的とする利用も見ることができる。

神田では「一人で勉強する」が来館目的として39%で一番多く、次いで「本を借りる」の割合が高かった。2階は教室とMULCがあるので、「ゼミ・サークル・授業」「くつろぐため」という利用は、神田で多く見られた。MULCの利用目的は全体で28%の割合を占め、その中で「先生や友人と会話」の21%割合が高い。神田での学習ツールは本だけではなく、ネイティブの教員や留学生との会話練習も重要である。さらに、MULCは計7つの言語エリアに区分し、各専攻言語の現地の街並みや建物が再現され、自分が興味を持って建物を見たり、外国の雰囲気に触れながらネイティブの言葉を聴けるのは、神田のみが持つ魅力的な学習環境である。

ICUの利用目的で一番多い項目も、「一人で勉強をする」56%であった。次いで「本を借りる」と「パソコンの利用」も高かった。ICUとCELLでは、「パソコンの利用」が約5割となり、ほぼ同じ結果となった。

3) 電子資料の利用

アナログ資料とデジタル資料の使い分けでは、各館では大きな差は見られなかった。アナログ資料は「深く理解したい」時に使い方に分けている傾向が見られたが、デジタル資料の活用としては、「短時間で検索」という項目が各館ともに70%程度であった。ICUではリザーブブック制度を運用しているが、あまり影響を受けず、全体的にほぼ同じ結果となった(図3)。

4) 図書館に対する基本的な要望

図4(1)~(4)の図書館に対する要望から、AIT利用者は「専門書の充実」が多く挙がるなど、図書を使った学習スタイルの利用者が多いため、さらに充実した環境を利用者が望んでいることが分かる。

CELLでは「PCの台数を増やす」の項目が高くなった。これは、PCを多く配置した環境を図書館内に置くことで、PCを用いた利用者や学習が浸透しているといえる。

神田では「閉館時間の延長」が約35%と一番高かった。次いで、「専門書の充実」が約32%と高く、図書館内で一人で勉強する利用者が多く、自分の学習のために専門書の充実

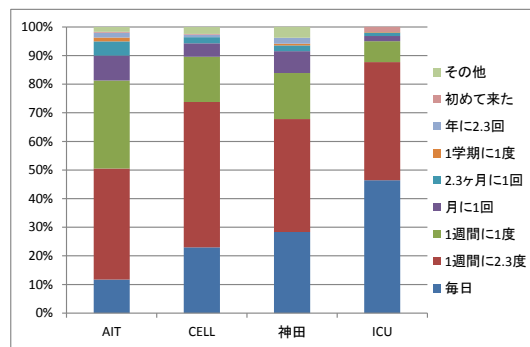


図1 利用頻度

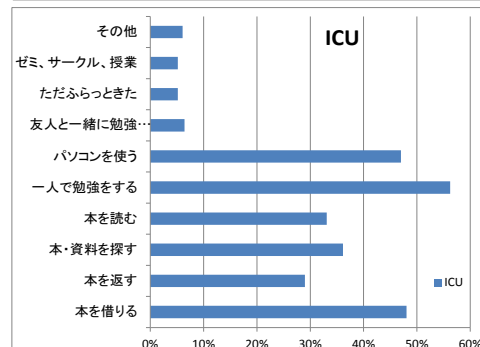
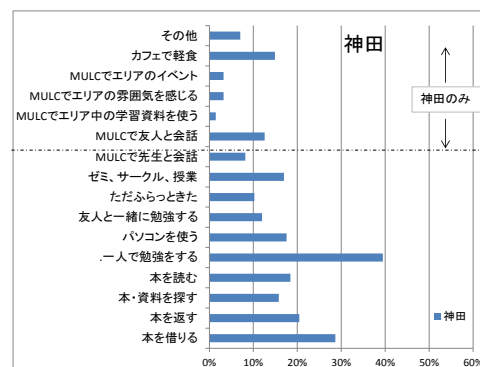
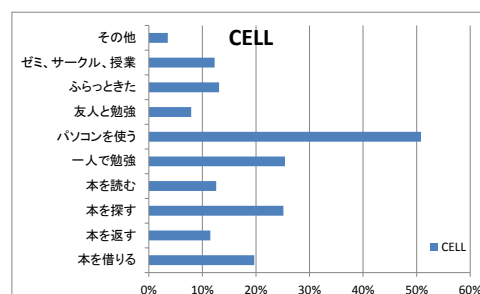
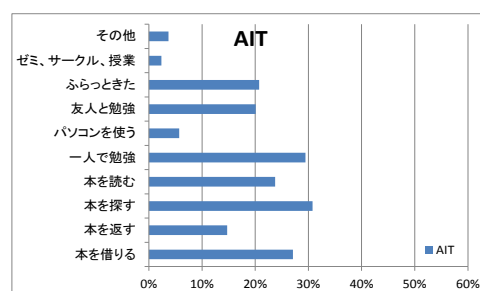


図2 利用目的

の要望が多く見られた。

ICU では「飲食できる場」が 42%と最も多く、4 館で最多であった。次いで「閉館時間の延長」約 34%であった。また「電子書籍の充実」、「電子書籍を WEB で見られる」など、電子図書に対する要望も 4 館で最も高かった。また ICU ではリザーブブック制度を運用しているため、本にかなり強い要望が寄せられている。

4 館の共通の要望としては、「専門書の充実」、「会話できる場」が多く見られた。大学図書館に対する要望は、本をよく利用する館は本に関して要望が高く、パソコンをよく利用する館はパソコンに関する要望が高くなるなど、提供されているサービスに強い関心が向けられていた。

以上の 4 館来館者の図書館に対する意識から、各図書館の利用を通じて、図書館は単に本の貸出・返却だけが求められているのではなく、図書館の特色に応じた様々な使われ方がされていることが分かった。

3. 利用者の図書館への意識

利用者の館内の座席の選択について、アンケートから得られた回答をもとに分析を行う。本の貸し借りをする以外は、図書館に対してどのような意識をもって利用しているのか、また利用者の館内における居場所の選択行動について整理していく。

3.1 利用者のお気に入りの座席とその選択理由

図書館内の最もよく利用する座席と二番目によく利用する二つの座席について、選択理由もあわせてアンケート調査で回答してもらった。

1) 愛知工業大学附属図書館 (AIT)

AIT で最もよく利用する座席と二番目に利用する座席は、ともに書架に近い四人掛け机が人気であった。AIT の利用者は「本を探す」、「勉強」としての来館目的が多く、座席選択の理由は「利用する書架の近く」、「作業しやすさ」などが座席選択として重視されている(図 5)。

2) 手前大学メディアライブラリー—CELL (CELL)

CELL では、最もよく利用する座席と二番目に利用する座席は、1 階 8 人掛け机と地下の窓際にあるカウンター席であった。CELL では 1 階、地下階ともパソコンの利用が多く、「作業しやすさ」が選択理由として高かった。また地下の座席選択の理由は、「静かだから」の割合が多かった(図 6)。

3) 神田外語大学図書館 (神田)

神田では、1 階のいくつかの種類個人席と 2 階 MULC が人

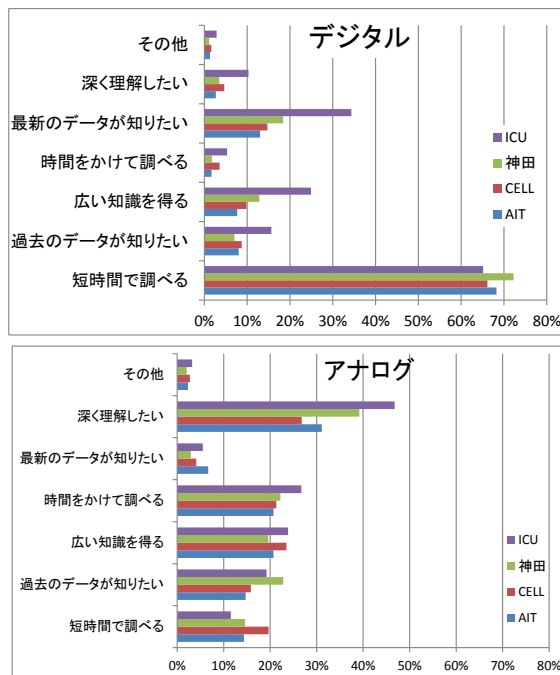


図 3 各館 資料の使い分け

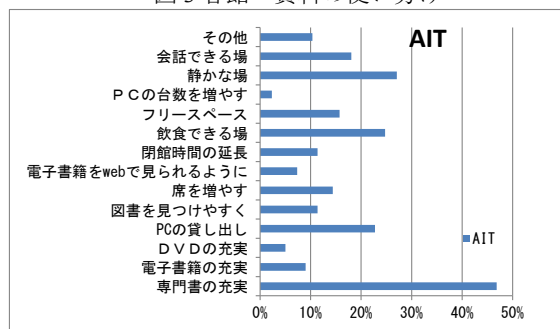


図 4(1) 図書館に対する基本的な要望(AIT)

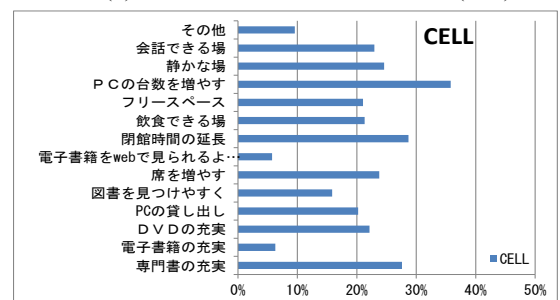


図 4(2) 図書館に対する基本的な要望(CELL)

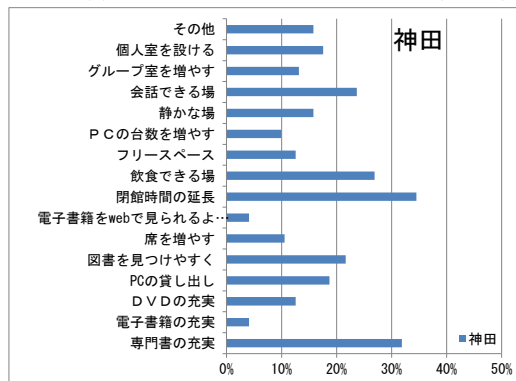


図 4(3) 図書館に対する基本的な要望(神田)

気であった。個人席の選択理由は「視線が気にならない」、「集中できる」などの選択理由が多かった。学生の多くは、勉強するために適している座席を選んでいるようである。MULCの選択理由は「リラックス」、「友人と座る」が多く、MULCは友人とのおしゃべりをするのが目的で利用しているともいえる(図7)。

4) 国際基督教大学図書館 (ICU)

ICU では、パソコンデスク席と窓際に配置された個人キャレールを気に入っている座席であると答えた利用者が多かった。パソコンデスク席では「パソコンがある」という理由が高く、窓際に個人キャレール席は「視線が気にならない」、「作業しやすさ」などの選択理由が多かった(図8)。ICU でも、視線を遮ることの出来るような個人キャレールに座るなど、集中して勉強することに適した座席を選んでいるといえる。

3.2 選択からみる図書館への利用意識

大学図書館では、個人席は常に利用者が勉強に集中できる人気席であり、個人席だけではなく、書架と壁などで囲まれている空間にある多数掛け机席も人気があった。また、利用者は窓際の座席選択に対して、窓から見える景色や眺望などはあまり影響を受けていないようである。むしろ、自分の作業がしやすい座席を選んでいるといえる。

一方で、図書館は学習もしくは読書するためだけではなく、多様な学習活動が展開され、また学生や教員とも交流する出会いの空間でもある。利用者の様々なニーズに対応した学習の「場」を提供することが、これからの図書館の魅力を高める重要な要素となる。

4. 利用者の座席選択の特徴

そこで利用者は実際に館内をどのように利用しているのか、利用者の館内における利用実態と選択行動について、15 分ごとの巡回調査の結果から読み解いていく。

4.1 館内利用者の時刻推移

来館者の時刻変動をみると、各館の一日の来館者数に対するピーク時の割合は、AIT は 12:30 に 81 人(10.9%)、CELL は 14:30 に 114 人(13.0%)、神田は 14:45 に 55 人(9.2%)、ICU は 14:30 に 178 人(24%)となっている。各館の着座行為率(着座人数/滞在者数)をみると、AIT、CELL と神田の 3 館の着座行為率は 8 割であり、ほぼ同じ結果となった。一方、ICU はオスマー館のスタディエリアにはパソコン席しかなく、利用者はほとんど席に座っており、着座行為率は平均 95%と他館に比べて非常に高い結果となった。大学図書館の着座行為率は約 8~9 割であり、これは公共図

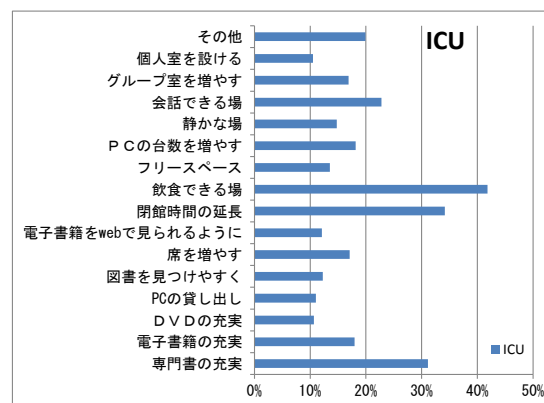


図 4-(4) 図書館に対する基本的な要望 (ICU)

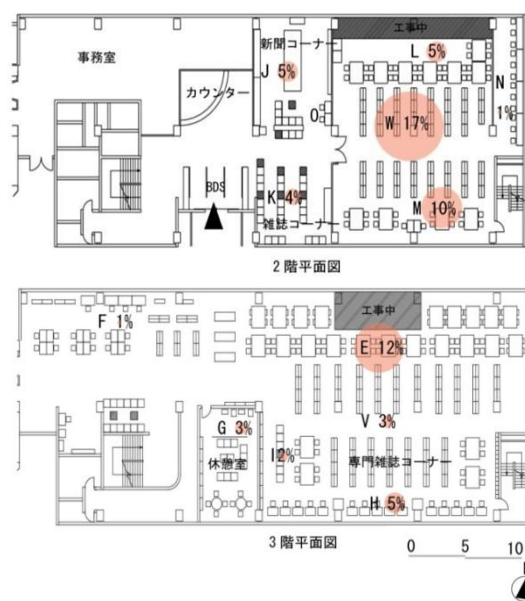


図 5 AIT で最も気に入っている座席

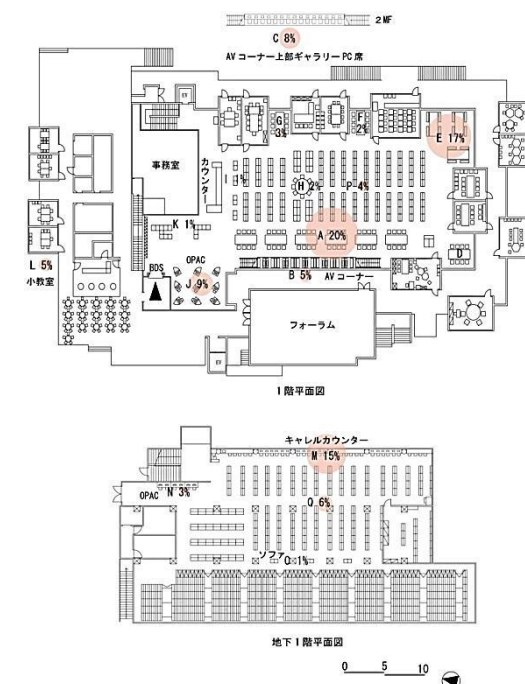


図 6 CELL で最も気に入っている座席

書館の着座行為率約 6 割と比べると非常に高い。これらにより、大学図書館内で着座する利用者は多く、そのため大学図書館の座席(居場所)に関する計画は重要だと考える(図 9(1)~(2))。

4.2 各館内で行為の内容

AIT と神田では「勉強」の行為がほぼ 35%と高く、また「読書」、「本を探す」などの行為も高くなっている。CELL と ICU 館ではデスクトップパソコンやノートパソコンの貸出サービスがあるので、「パソコンを使う」行為が他の館よりも高い。また CELL の 1 階ではたくさん的小教室(CELL)や 8 人掛け机が設けられるので、「会話」の割合が 4 館で最も高かった(図 10)。

大学図書館に求められる機能は、本を使った学習に限らないということが読み取れる。確かに、多くの利用者は基本的に本を探したり借りたりするために来館するが、「会話」、「パソコンを使う」などといったような別の目的で来館する人もいる。

4.3 利用者の館内分布

AIT では全体的に、「4 人掛け机」が友人と一緒に勉強する場として人気であった。AIT の利用者は館内の各階に分散しており、グループで集まっている場所があまり見られなかった(図 11)。

CELL の利用者が一番多く集まる場所は、1 階の「8 人掛け机」が並んでいるところであり、この辺りは個人としてもグループとしても利用しやすくまた書架にも近い。CELL で最も利用時間の長い席になった(図 12)。

神田の利用者は、館内中央部の個人席に分散しており、グループ利用者はグループ室で集まるなど、1 階は全館的に静かな雰囲気を醸し出していた(図 13)。

ICU の利用者が一番多く集まる場所は、オスマー館の「パソコン席」であった。パソコンで情報を検索しながら、レポートや課題などを作成するなど、様々な複合的な利用も行いやすいため、パソコン席は最も利用時間の長い席となった(図 14)。

アンケート調査によるお気に入りの座席選択とプロット図の分析より、図書館内での座席の選択に対して、利用者は目的としている自分の作業がしやすい座席を利用していることが整理された。次では利用者を「個人」と「グループ」二つ分けて、館内利用の実態分析を行うことにする。

5. 個人利用とグループ利用による場の選択行動

各図書館内において、学習やグループ作業、友人と会話など多様な行為が行われていることが分かった。そこで巡回

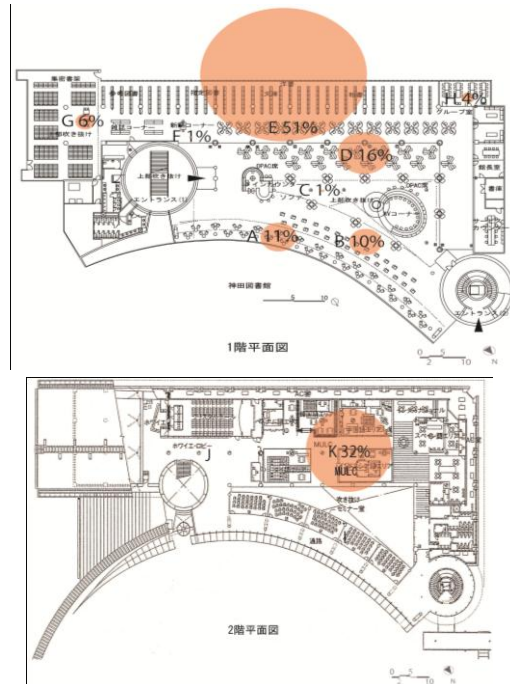


図 7 神田で最も気に入っている座席

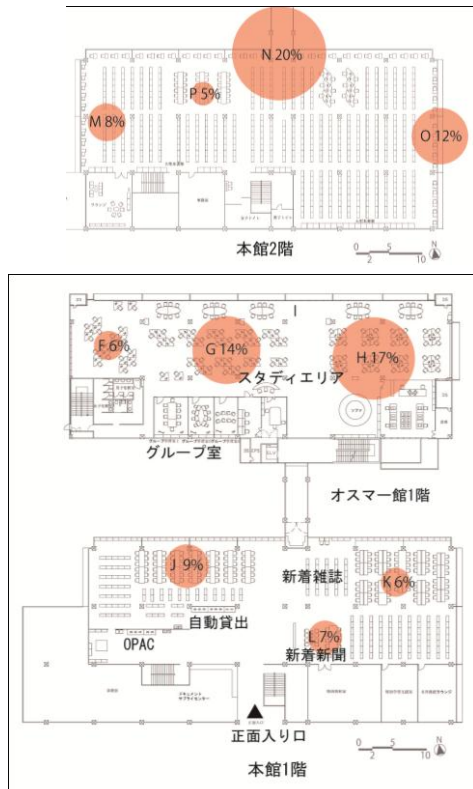


図 8 ICU で最も気に入っている座席

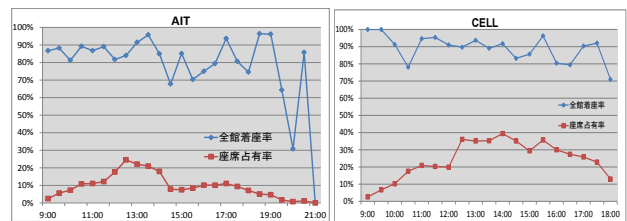


図 9(1) AIT と CELL の着座率と座席占有率

調査から、大学図書館内の利用者を「個人」と「グループ」の二つに分けて、実際に館内をどのように利用して、どのような場所を選択しているのかを整理する。

5.1 「個人」と「グループ」利用人数の割合

各館とも「個人」利用者が6～7割と多く、特に ICU では95%が「個人」利用者であった。CELL では「グループ」利用者が4割と一番多かった(図15)。

5.2 館内での行為内容

AIT における「個人」、「グループ」利用者ともに「勉強」の行為が多い。「読書」、「本を探す」と「雑誌・新聞」の利用は、「個人」利用者によく見られた(表2)。

CELL では、「個人」利用者は「パソコンを使う」が64%と多く観察され、「グループ」は「会話」が含まれる行為の割合は28%を占める。キャンパスの中心に位置しているためか、学生たち同士、学生や教員と交流の場としての行為が多い(表3)。

神田では、「個人」利用者は「勉強」の割合が高く、「グループ」利用者は「会話」をしながらパソコンを使う勉強や読書などの複合利用行為割合が61%を占める。また「グループ」利用者は、「講義」の割合が15%もあった(表4)。

ICU ではほとんどが個人利用で、「個人」利用者は「パソコンを使う」が53%と高く、「グループ」利用者は「勉強+会話」が61%であった。「会話」が含まれる行為割合は4%しかなく、ICU 全館で静かな雰囲気が醸し出されていた(表5)。

5.3 「個人」と「グループ」利用者の場所分布

AIT では、「グループ」利用者は、書架近くの4人掛け机をよく利用しており、特に会話が行われる席は一日を通して、いくつか限定されていた。階で利用内容が分かれておらず、同じフロア構成のため、「個人」と「グループ」利用者が各階で混在していたが、全館的に静かな雰囲気であった(図16)。

CELL の1階では、常にいろんな場所で「会話」、「勉強」、「パソコン」など多様な行為が行われており、かなり開放的で賑やかな利用状況となっている。また「個人」利用者は地下1階の個人席を好んで利用しており、1階よりは静かな雰囲気であった。1階が動の空間で地下1階が静かな空間として、フロアを通じて利用が分けられている(図17)。

神田の1階では、「個人」利用者がさまざまな個人席を偏りなく分散して利用している。グループで利用する際は1階奥のグループ学習室を使っている。学生たちは静かに勉強する場所としての1階、会話やコミュニケーションの場所として2階 MULC や3階カフェを使い分けしているといえる(図18)。

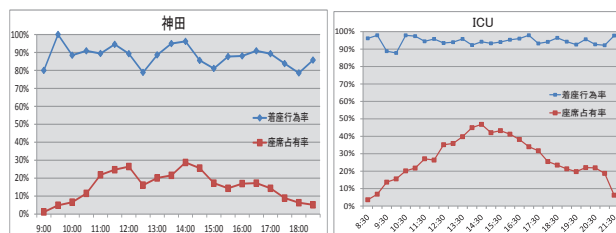


図9-1) 神田とICUの着座率と座席占有率

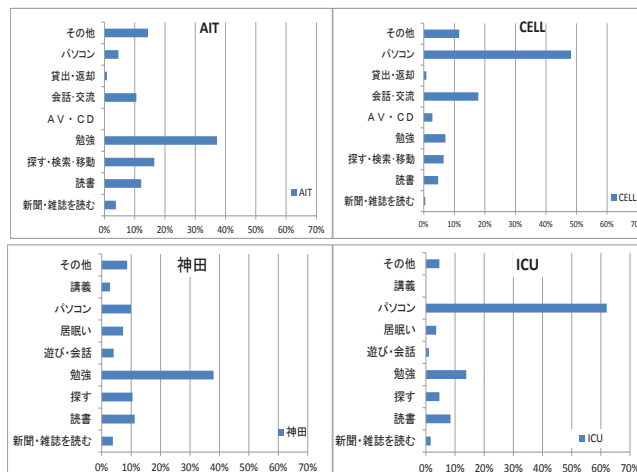


図10 各館の利用者の行為割合

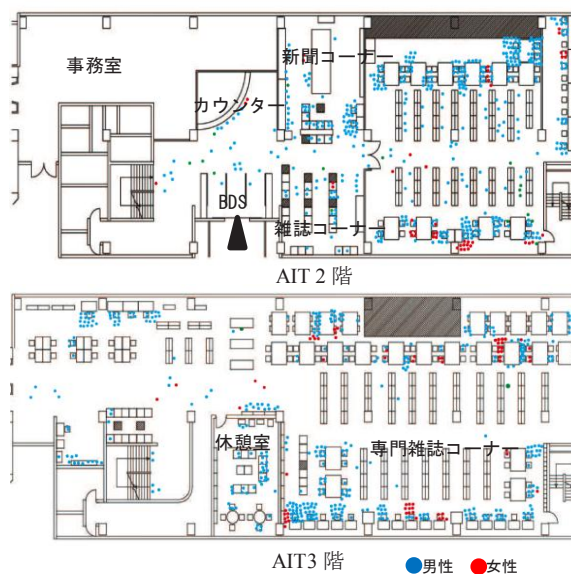


図11 AIT 利用者の滞り場所

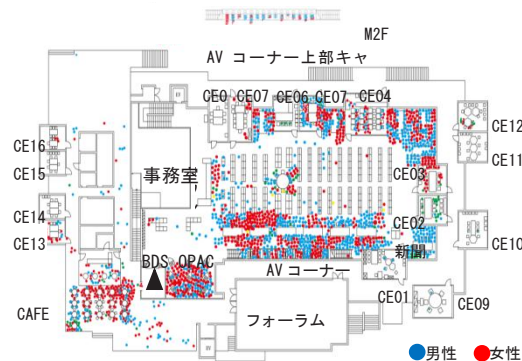


図12 CELL 1階利用者の滞り場所

ICU の「個人」利用者は来館の目的によって、作業しやすいパソコン席と個人キャレル席を利用しており、「グループ」利用者は「グループ」室で友人と一緒に会話・勉強などを利用している。しかし、「グループ」室が全館で3つしかなく、「グループ」利用者のための場所が少し増えれば、ICU でも「グループ」利用の行為割合が増えると考えられる(図 19)。

以上から、大学図書館には静かな作業の場と友人と勉強や会話できる場の両方が必要だと思われる。利用者が静かな場と賑やかな場をうまく使い分けられるように、座席や机、階構成や距離感などの計画が重要である。

6. 居場所としての図書館像

6.1 個人で勉強する場として

1) 着座への強い意識

着座行為率から見ると、AIT, CELL, 神田3館の着座行為率はほぼ 8 割であり、ICU は 95%と非常に高い。大学図書館の着座行為率は、公共図書館の着座行為率約 6 割と比べると非常に高い。大学図書館の利用者は、館内で本を探すなど立って作業する人は少ないが、座席に座わって作業する人は非常に多いことが分かる。

2) 他人からの視線

アンケートと巡回調査結果からみると、大学図書館では一人で勉強している利用者が圧倒的に多い。このような個人利用者は、他人の視線が気にならずに静かに集中して作業するため、キャレル式の囲まれた座席や個室を好んで選んでいる。

3) 囲まれている空間

静かに勉強するための座席は個人席だけではなく、書架などに囲まれている空間に設けられた多人数掛けの机席もよく利用されている。図書館内では、壁と書架、壁と壁、書架と書架など囲まれている空間が形成されている。こうした空間にある多人数掛けの机席では、他人の視線の大部分を遮ることができ、また書架にも近いので、図書を用いて勉強している利用者がよく見かけられた。

また同じ座席の種類であっても、場所によっては使い方に差が見られた。館内の座席には様々な特徴を持たせ、利用目的に応じて座席を選択できるように計画する必要がある。

4) 窓に対する意識

大学図書館では、窓際の座席が選ばれているが、「窓際で明るい」、「風景が見える」などの割合が少なく、利用者は座席選択に対して、窓から見える景色などはあまり影響を受けていないようである。利用者は自分の作業に適した座席を

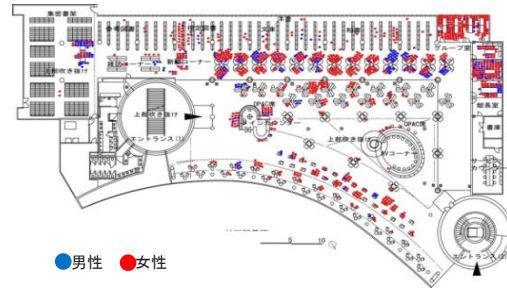


図 13 神田 1 階 利用者の滞在場所

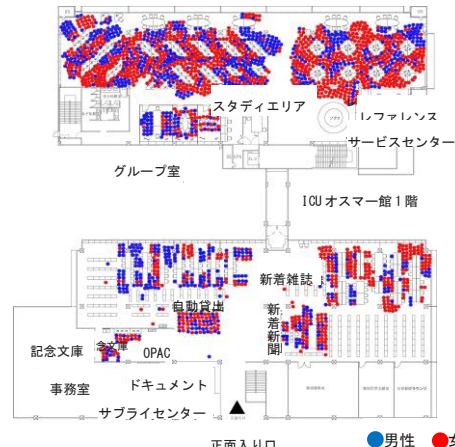


図 14 ICU 1 階 利用者の滞在場所

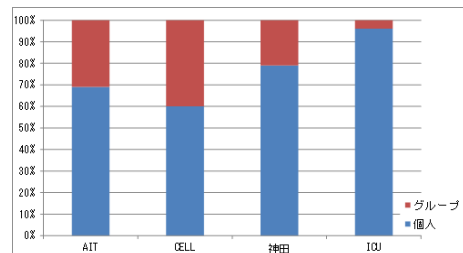


図 15 各館で「個人」「グループ」の割合

表 2 AIT 「個人」「グループ」利用の割合

行為	個人	個人	グループ	グループ	合計	合計
新聞・雑誌を読む	28	3%	4	1%	32	3%
読書	157	18%	3	1%	160	13%
探す・検索	63	7%	12	3%	75	6%
勉強	318	36%	141	36%	459	36%
会話	0	0%	114	29%	114	9%
居眠り	142	16%	8	2%	150	12%
パソコン	62	7%	1	0%	63	5%
その他	112	13%	25	6%	137	11%
会話+読書	0	0%	3	1%	3	0%
勉強+会話	0	0%	56	14%	56	4%
会話+遊び	0	0%	4	1%	4	0%
検索+会話	0	0%	16	4%	16	1%
アンケート+会話	0	0%	4	1%	4	0%
合計	882	100%	391	100%	1273	100%
		69%		31%		100%

表 3 CELL 「個人」「グループ」利用の割合

行為	個人	個人	グループ	グループ	合計	合計
新聞・雑誌を読む	6	0%	0	0%	6	0%
読書	107	7%	4	0%	111	5%
探す・検索	7	0%	0	0%	7	0%
勉強	137	9%	42	4%	179	7%
会話	0	0%	501	50%	501	20%
AV	57	4%	34	3%	91	4%
パソコン	941	64%	175	18%	1116	45%
軽食	20	1%	0	0%	20	1%
その他	185	13%	23	2%	208	8%
パソコン+勉強	0	0%	32	3%	32	1%
パソコン+会話	0	0%	71	7%	71	3%
勉強+会話	0	0%	4	0%	4	0%
会話+軽食	0	0%	107	11%	107	4%
合計	1460	100%	993	100%	2453	100%
		60%		40%		100%

選んでいる。これは、公共図書館の利用者が「明るさ」で窓際の座席を選択しているのに比べると、窓に対する意識が大きく異なる^{文16)}。

6.2 コミュニケーションの場として

1) グループの利用

各図書館での場の選択行動から、「グループ」利用者は開放的な空間にある多人数掛けの閲覧席や、会話できるグループ室を利用している。「グループ」利用者は、館内の様々な場所で交流していることが多く見られた。

2) 空間のヒエラルキー

現在の大学図書館では友人と一緒に作業するために、コミュニケーションを伴う学習スタイル(アクティブ・ラーニング)が増えている。CELLは、1階と地下1階とで利用の内容が大きく異なり、1階が動の空間で地下1階が静の空間として利用されている。神田では1階は静かな場所で、2階のMULCでは友人と一緒に会話や共同作業の場所として利用されている。CELLと神田では、フロアで明確に利用が区分され、静かに集中する場とコミュニケーションの場がうまく使い分けられている。

静かに集中する場とコミュニケーションの場をうまく使い分けるために、階で立体的に積層する、また平面で吹き抜けを介在させて構成する、様々な座席タイプを配置するなど、オープンにして開いていくだけではなく、段階性を持って隔てることが必要である。

3) 席の視点高さや座席のタイプ

CELL1階AVコーナー上部ギャラリーのパソコン席は床の高さが中2階にあるため、静かな空間になっていて、下部1階の賑やかな雰囲気と分けられている。また地下ではカウンター席が静かな雰囲気となっていて、座席タイプによって利用者は空間を使い分けしているといえる。

6.3 パソコンを利用する学習の場として

1) 無書架の場

大学図書館でのパソコンの利用は増えている。図書館で紙の参考図書を読んで勉強するだけではなく、インターネットでデジタル資料や電子図書を読む学習スタイルが増加している。現在の大学図書館では、一般的な紙の書籍の開架書架が配置されており、あるコーナーでは、インターネットサービスを提供しているなど、パソコンでデジタル資料、書籍などのアナログ資料など両方を使いこなしている。調査から見た、アナログ資料とデジタルの使い分けでは、アナログ資料は各館ともに「深く理解したい」という傾向が見られたが、デジタル資料の活用としては、「短時間で検索」という項目

表4 神田「個人」「グループ」利用の割合

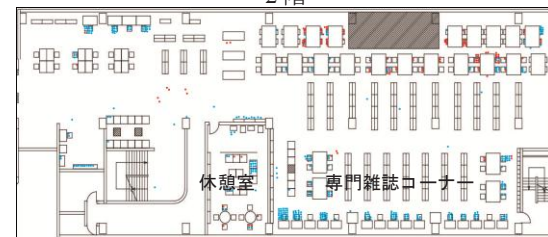
	個人		グループ		合計	
新聞・雑誌を読む	42	5%	0	0%	42	4%
読書	126	15%	0	0%	126	12%
探す・検索	36	4%	0	0%	36	3%
勉強	370	43%	7	3%	377	35%
会話	0	0%	48	21%	48	4%
AV	5	1%	0	0%	5	0%
パソコン	103	12%	0	0%	103	10%
講義	0	0%	34	15%	34	3%
その他	169	20%	0	0%	169	16%
パソコン+会話	0	0%	58	25%	58	5%
勉強+会話	0	0%	79	34%	79	7%
読書+会話	0	0%	4	2%	4	0%
合計	851	100%	230	100%	1081	100%
	79%		21%		100%	

表5 ICU「個人」「グループ」利用の割合

行為	本館			オスマー館		
	個人	グループ	合計	個人	グループ	合計
新聞・雑誌を読む	85	4%	0	0%	85	4%
読書	408	19%	4	18%	412	19%
探す・検索	241	11%	0	0%	241	11%
勉強	725	33%	0	0%	725	33%
会話	2	0%	16	73%	18	1%
AV	0	0%	0	0%	0	0%
パソコン	351	16%	0	0%	351	16%
印刷	22	1%	0	0%	22	1%
その他	335	15%	0	0%	335	15%
パソコン+会話	0	0%	0	0%	0	0%
勉強+会話	0	0%	0	0%	0	0%
読書+会話	0	0%	2	9%	2	0%
合計	2169	100%	22	100%	2191	100%
	99%		1%		100%	



2階

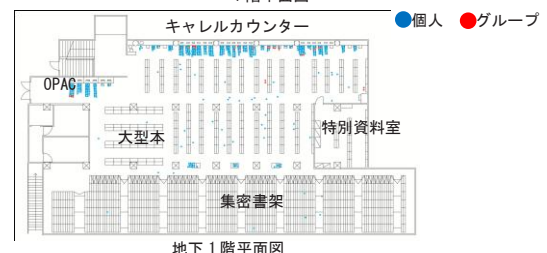


3階

図16 AIT 「個人」と「グループ」の滞在場所



1階平面図



地下1階平面図

図17 CELL 「個人」と「グループ」の滞在場所

が各館とも高く、各館で大きな差は見られなかった。ICU ではリザーブブック制度を運用しているが、あまり影響を受けていないようである。これからは、紙の書籍と電子書籍は、どちらも欠かせないため、図書館の施設サービスとして新たな取り組みが必要であろう。

2) パソコンの利用環境

現在多くの大学図書館でパソコンによる学習サービスを提供しており、パソコン利用が図書館利用の選択肢の一つとなっている、今後図書館でのパソコン利用は増えることが予想されるため、デスクトップパソコンの設置や借りることができるノートパソコン台数の増設、館内で無線LANなどの設備は必要と思われる。またキーボードを叩く音にも配慮が必要となり、静かな作業空間とは切り離して計画するべきである。

3) 施設サービスと利用者の要望

大学図書館では多様なニーズを持っている利用者があり、各図書館の施設サービスに応じた利用が行なわれている。つまり、図書をよく利用する館では図書に関する要望が高く、パソコンをよく利用する館はパソコンに関する要望が高くなるなど、提供されているサービスに強い関心が向けられていた。

4館ではアナログ資料とデジタル資料の使い分けにおいて大きな差は見られなかった。デスクトップパソコンを数多く設置している図書館では、着座行為率が 9 割と高く、パソコン利用が今後ますます増えると予想される。これからは、デジタル資料・アナログ資料・コミュニケーションの場を一体的に利用できるよう計画する必要があると思う。

6.4 滞在を促す場として

1) 飲食できる場として

大学図書館では、平均滞在時間が 1 時間の利用者が多かった。アンケートでは、どの館でも「飲食できる場」が 25% 以上求められていた。特に、滞在時間が 1 時間 46 分と一番長い ICU では、「飲食できる場」への要望が 42% と高い。図書館で利用者が交流できる空間を設けることは、図書館の魅力を高める重要な要素と考えられる。

2) 会話できる場として

利用者の「会話できる場」という要望は、どの館でも 20% 以上程度求められていた。この会話できる場では、周囲の利用者に音漏れの影響を受けない空間が求められている。これらは「図書館」という機能だけではなく、付加機能であるが利用者の滞在を促し、そして今まで図書館を利用していなかった利用者たちを引き付ける魅力となるかもしれない。



図 18 神田 「個人」と「グループ」の滞在场所

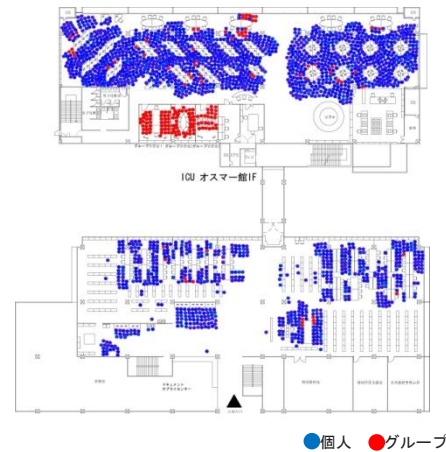


図 19 ICU 1階 「個人」と「グループ」の滞在场所

6.5 今後の課題

巡回調査により利用者は館内全体に分布することが分かり、館内で人気の場所についていくつか特徴が見られた。また、利用者の目的などによって利用するコーナー、座席の種類などにも特徴があると考えられるが、今後はさらに追跡調査などで利用者の入館から退館までの動線、行為内容など詳細な調査を行う必要がある。また来館者アンケートと行動観察調査を組み合わせて分析を行い、さらに利用者の目的意識における館内利用行動の特徴について明らかにしたいと考えている。

また、今回のアンケート調査は調査日に来館した利用者を対象としており、調査日に図書館を利用しなかった人たちはどのような意識を持っているか、今後はアンケート調査の対象範囲を広げたいと考えている。

謝辞

調査に快くご協力していただいた図書館長をはじめ各図書館の職員の方々に深く感謝します。

付記

本研究は平成 23～25 年度科学研究費補助金「『場』の概念からみた図書館における来館を促す建築的魅力に関する研究」(基盤研究 C 研究代表者: 中井孝幸)の助成を受けて行ったものである。

注釈

- 注 1) 神田外語大学附属図書館は 1 階にあり、2 階は MULC で巡回調査は行っていないが、アンケート調査では 1, 2 階を含める。
- 注 2) 巡回調査においては調査員の目視により、多少の誤差は生じてしまう。また、館内を巡回して調査するため、時間にズレを伴うが、事前に巡回ルートを決し同一ルートで巡回することで断面的なプロット図を作成した。

参考文献

- 1) 米澤誠: インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ: 大学図書館におけるネット世代の学習支援、「カレントアウェアネス」pp.9-12、2006 年 no.289、
- 2) 今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館) 報告書: 教育と情報の基盤としての図書館. 筑波大学、pp.157、2007 年
- 3) 畠山珠美(ほか): 図書館の再出発: ICU 図書館の 15 年、大学教育出版、2007 年
- 4) 永田 治樹: 大学図書館における新しい「場」インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ、名古屋大学附属図書館研究年報(7)、pp.3-14、2008 年
- 5) 秋野崇大: 図書館の雰囲気場の選択に与える影響に関する研究、愛知工業大学卒業論文、2009 年 3
- 6) 原 郭二・加藤 彰一・木下 誠一: 大学図書館におけるコモンスペースのプレースメイキングに関する考察: 電子ジャーナル化に伴うコモンスペースの利用変化に関する研究、東海支部研究報告集(47)、pp.421-424、2009 年 2 月
- 7) 原 郭二・加藤 彰一: 学習スタイルの変化から見た大学図書館におけるコモンスペースの在り方に関する研究: ラーニング・コモンズのファシリティマネジメント研究、日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)、pp.457-458、2009 年 8 月
- 8) 原 郭二・加藤 彰一: 学習スタイルの変化から見た大学図書館のコモンスペースの計画と利用に関する研究: ラーニングコモンズのファシリティマネジメント研究、東海支部研究報告集(48)、pp.369-372、2010

年 2 月

- 9) 原 郭二・加藤 彰一: 大学図書館のコモンスペースの利用と PBL の導入に関する研究: ラーニングコモンズのファシリティマネジメント研究、東海支部研究報告集(48)、pp.374-376、2010 年 2 月
- 10) 柴山 依子・加藤 彰一・毛利 志保: アメリカにおけるグループワークを支援する学習環境の考察に関する研究— ジョージア工科大学 West Commons をケーススタディとして、東海支部研究報告集(49)、pp.421-424、2011 年 2 月
- 11) 柴山 依子・ファヘッド・ハサウネ・加藤 彰一・毛利 志保: 大学図書館におけるグループワークを支援する学習環境に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)pp.463-464、2011 年 8 月

関連発表論文

- 12) 岩倉光助・高橋徹・蔣逸凡・中井孝幸: 大学図書館の施設構成からみた学習スタイルについて: 居場所の形成からみた大学図書館の施設計画に関する研究・その 1、東海支部研究報告集(52)、pp.457-460、2012.2
- 13) 蔣逸凡・岩倉光助・高橋徹・中井孝幸: 大学図書館における学習スタイルと座席選択について: 居場所の形成からみた大学図書館の施設計画に関する研究・その 2、東海支部研究報告集(52)、pp.461-464、2012.2
- 14) 蔣逸凡・中井孝幸: 「個人」と「グループ」利用からみた大学図書館での居場所形成、日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)、pp.245-246、2012.9
- 15) 蔣逸凡・石川睦・大山真司・中井孝幸: 大学図書館の特色による利用者の利用意識と座席選択について: 「場」の概念からみた図書館計画に関する研究・その 2、東海支部研究報告集(53)、pp.493-496、2013.2
- 16) 大山真司・石川睦・蔣逸凡・中井孝幸: 大学図書館と公共図書館における利用者の座席選択からみた利用意識: 「場」の概念からみた図書館計画に関する研究・その 3 東海支部研究報告集(53)、pp.497-410、2013.2

(受理 平成 25 年 3 月 19 日)